

れらを誌して恰も欣喜雀躍たるものがあつたかの如きムアは、おそらくローレンスの心から最も遠い処にいた。偉大な作家の私生活とモデル問題は、世の東西を問わず物議を醸す性質のものである。殊にローレンスは、恩義ある人を悉くその作品で貶めたとして悪名高い作家であるから、無論各々の交渉を紹介して読者が面白く読まぬ筈はない。それはそれで構わぬとして、不都合な点は、ローレンスが恰も伝記作家と同程度に品下る心で人に接したという印象を残すことである。ローレンスに交わりを求めた人が大略卑俗な意図でそうしたと極言するのはよい。カーズウェルは自らローレンスにそう語って、私らにはこの非凡な作家が作中で知己を貶めざるをえなかつた事情を少しく明らかにした。そこに一種ローレンスを崇高化する心理が汲みとられても、真実は語らねばならぬという志はよい。ムアの誤ちは、公平無私の事実を誌すことが可能であると思ひ定めた点にある。しかも事実を洩れなく記すことが、何も書かぬ場合に劣ることを想定しなかつた事にある。例えば、コンウォール滞在中のこととして、ムアは当然にも、Hockingなる一農夫とローレンスの関係に言及する。著者自らこの関係の真相は知る由もない故に、フリーダはMrs Luhanに、二人の間に“a thing”があつたかと問われて肯定的な答を返した。ローレンス自身はカーズウェルに対し強く否定する言を放った、等々の「事実」を紹介するのである。フリーダは心中の事をみな外部に出す女性であつたように思えるが、「好色文学」を草したと名高く、その実人の魂の救済しか眼中になかつた作家の伝記を後世に残そうとする研究家が、収集資料の公表を殆ど無差別に而も読者に半ば阿るごとく行なつたことは悔まれることである。この種の不確定な資料が無用の意味を持たぬためには、これを誌す者に明廉の志があつて、自ずから作品に清冷の気

が通つていなくてはならない。ローレンスの著作が伏字混りて出版されるか否か、そういう事が私らの心を煩わすことがないのは、彼の心中の靈気たるやその作品に遍満するからである。フリーダによる伝記さえ読者に或る感慨を催すのは、彼女がただローレンスという人にのみ頼つてその伝記をしたためたからであろう。ムアに何故ローレンスの作品に導かれた伝記が書けなかつたかは、氏のローレンス論を見れば大半了解のゆくことではある。この人の感性は、いか様にもローレンスに届かなかつた。そういう凡庸の研究家が、「ブレイクとローレンス」とW. H. オーデンも認めた空前絶後の独創家の生涯に係つた末に、ローレンスに「関する」研究に資するところ大きく、同時にローレンスの片鱗さえ表徴しえぬ奇異なる著作を世に問うたのである。この事態を表すべき言葉を私は知らぬが、とまれH. T. ムアのローレンス伝は、完璧な舞台の上に主人公のみの登場せぬ、仮に「幽霊劇」にも喩うべき必読一見の書なのである。

Harry T. Moore: *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*, 1974, London, Heinemann.

*Cahiers Marcel Proust 8:*  
*Le Carnet de 1908,*  
établi et présenté par  
Philip Kolb

鈴木道彦

文学の研究は、一面で推理小説に近づいた

ようである。そして1度推理の面白さを味わった者は、容易にその誘惑を絶ち切れないものであるらしい。

たとえばラコストによる筆蹟研究が、ランボーの《地獄の一季節》と《イリュミナシオン》の創作年代を逆転させるという劇的な結論をもたらしたのは、そうした推理のなかでも最もスリルに富んだものの1つであろう。その成果が30余年後の今日ほぼ完全に確立されたことは、最近のアントワヌ・アダン編プレイヤード版ランボー全集と従来の同版とを比較するまでもなく明らかである。

これほどの劇的な逆転ではないにせよ、ブルースト研究においても従来から各種の推理が駆使されていたのであって、その先鞭をつけたのはロベール・ヴィニユロンとアルベール・フィユラの2人であった。彼らの主要な研究が早くも1930年代に発表されていることは、今日の豊富すぎるくらいに豊富な資料から見てその欠点をいくらかでも指摘できるとはいえ、やはり驚異的なことであったと言わねばならない。一方本書の編者フィリップ・コルブは、その精密で執拗な探求と職人的な嗅覚とによって、第2次大戦前からすでに1級の名探偵としての資質を示していた人物である。しかし彼の真の功績は《マルセル・ブルーストの書簡研究》(1949年)に始まる本格的な実証研究によって、第2次大戦後のブルースト学に1つの基盤を与えたことだろう。事実コルブとともに推理は飛躍的に発展し、研究者は或る意味でブルーストについてブルースト本人が知っていた以上のものを知りことも可能になったのである。なお現在プロン社から第3巻まで刊行された《ブルースト書簡全集》が、このコルブを編者としていることもここでつけ加えておこう。

このようにブルースト研究においては従来から実証と推理がきわめて重視されていたのであるが、そこに第2次世界大戦後はもう1

つの要因がつけ加わった。自筆草稿の発見である。1952年にベルナール・ド・ファロワがその草稿類のなかから初期の長編《ジャン・サントゥイユ》を、また1954年に《サント・ブーヴ反論》を発掘して以来、研究者の注意はこの膨大な草稿の山に集中した。さらに1960年代になって、それら草稿がパリの国立図書館に収められ、一般に利用できるようになるに及んで、その研究と解説は急速に進んだのである。

それら草稿の山のなかにcarnets(手帖)と称せられるものがある。非常に縦長の変わった形の4冊の手帖であって、そこにブルーストはぎっしりとメモを書きつけているのだが、コルブがここに発表したのは彼が解読したその第1冊目の手帖の文章である。

もともとブルーストの筆蹟はおそろしく読みづらいものだ。私もかつて1955-6年ごろ、当時ガリマール書店に保管されていた作品の或る部分の原稿をマイクロ・リーダーで判読した経験があり、語学力の不足もあってその作業は文字通り難航し、結局分からずじまいになった箇所も少なからずあったのであるが、その経験からしても解読が容易でないことは証言できる。コルブの功績の第1は、メモであるだけに一層読みにくい手帖の1冊を、誰にでも近づける形に整えて提示したところにある。或る評者がこの解読に当たってのいくつかの誤読を指摘しているとはいえ(《ブルースト友の会々報》第27号)、その努力はやはり虚心に評価すべきものだろう。

だがむろん本書の価値はそれだけに尽きるものではない。むしろ本書の真価は、それらのメモの詳細な注釈とその日付決定にあると言すべきである。そしてその日付決定と絡んで、コルブがこの1冊の手帖の解読を志した目的もまた明らかにされるのである。

この名探偵の鮮かな手つきを紹介するために、彼が〈序文〉のなかで語る声に少し耳を

傾けてみよう。彼はまずブルーストがこの手帖を入手した経緯を説明して、これは作曲家ピゼーの未亡人であるストロス夫人から贈られたものだという。それは1908年2月3日付同夫人あてのブルーストの手紙に〈あなたの下さった小さな手帖 (petits almanachs) が私をたいそう喜ばせた〉とあり、それがこの手帖にメモをつけはじめた時期と正確に一致するからである(序でにコルブはストロス夫人がこの手帖を求めた店も明らかにしている)。ついでコルブは詳細に、この手帖にブルーストがメモを記した日付を決定し、いわば手帖の歴史を作り上げていくのである。たとえば3ページ目は1908年5月に書かれたらしい。その理由はここにアヴァレAvarayという文字があり、これはブルーストが5月27日付のアルピュフラ侯爵あて書簡(未発表)のなかでアヴァレ伯爵なる人物に会いたいと告げた時期のものと思われるからである。5ページ目の裏側は同年7月に書かれたものであろう。それはロベール・ド・モンテスキウが同年7月初めにブルーストの許に持参したその著書のなかの献辞に言及しているからである。9ページ目が書かれたのは1908年9月ないし10月である。なぜなら同年9月発行の《バリ評論》からの引用が見られるからである……。といった具合に、1つの些細な事実から次の事実を、さらにそこから第3の事実を、と連鎖的に事実をたぐり寄せ、その織り成している細かな網の目のなかに手帖の各ページを追いこみ位置づけていく謎ときの手口は、まさにコルブ得意の方法と言ってよい。

ところで同じ〈序文〉によれば、コルブがこの手帖に注目したのは、《サント・ブーヴ反論》と《失われた時を求めて》の関係を明らかにするという目的のためであった。事実1908年から1909年にかけて、この手帖の大部分のメモが記された時期は、ブルースト

がサント・ブーヴの批評方法を批判するエッセイを準備した時期であり、しかもそこから自分の小説を最終的に発見してゆく時期に当たっている。従ってこの手帖のメモを明らかにする作業は、作品の形成される決定的瞬間の作者の内心にふみこんで、その迷いや動揺を含めてこれを捉えようとする試みと言ってもよいだろう。だがそこから私には本書についていくつかの疑問が始まるのである。

まず、コルブがこの手帖から引き出した1908-1909年のブルーストの肖像はどんなものなのか? コルブによれば、1908年前半のブルーストはその小説を準備して一連の断章を書きつづっている。この小説の第1稿は同年夏ごろに完了するが、ここで小説は(コルブの想定では次々と素材が溢れ出て最初のプランに収まりきらぬために)中断されてしまう。他方ブルーストは少なくとも同年5月以前からサント・ブーヴにかんする評論を開始しているが、11月ごろから本格的にそれにとりかかり、手帖に無数のメモや引用を書きつけていく。ところがその評論は結局のところ実らない。その代りに翌1909年6-8月ごろのブルーストの書簡には《サント・ブーヴ反論》という題の小説のことが語られる。小説を中断してとりかかった評論が再び小説に変貌したのである。それはサント・ブーヴの批評方法に対する研究と批判とが、作者に新しい小説の構想を与えたからだ。コルブは言う。かくて準備された小説《サント・ブーヴ反論》は、評論《サント・ブーヴ反論》が展開するはずの思想の証明となるはずのものだろう。たとえばサント・ブーヴはすぐれた同時代作家の価値をまったく見誤ったが、ここからブルーストは教訓を引き出し、われわれが他人の性格についてまったく誤解し易いことを小説の基調にすえるだろう……。

私は本書の持つ重要な意義を認めた上で、このような著者の解釈にいくつかの点で抵抗

を覚えていることを指摘しておきたい。さしあたりそのうちの2点についてのみ言えば、第1は1908年夏に完成したという小説の第1稿である。実は私も当時のブルーストの草稿（とくに失われてしまった75枚の草稿）に、後には完全に抹消されることになる弟が登場することを重視して、弟の存在が作品の引き金になっているのではないかと想像しているのであるが、しかしこのときにブルーストがすでにまとめた小説の第1稿を完成していたとは思えない。少なくとも、そのように想定する根拠を私は持っていない。これが第1の疑問点である。

第2は《サント・ブーヴ反論》と小説の関係である。私もまたブルーストにおいては批評と小説が表裏一体をなしていると思うものであるが、しかしその関係はコルブが言うよりもさらに有機的で緊密に絡みあったものであろうと考えている。そのことについては他のところで述べてもいるので、今はくり返さない。ただ問題がサント・ブーヴ批判だけに限定されるものではなく、ラスキン論、文体論、模作など、ブルーストの試みた多様な全批評と小説の関係であることだけは言っておきたい。コルブは《サント・ブーヴ反論》が評論から小説へと変貌したことを強調する余り、小説のいっさいがサント・ブーヴを批判する評論から生まれたと考えているように見えるのである。

〈たとえばブルーストがサント・ブーヴの名を挙げてはいないにしても、彼が作中人物を提示する仕方を見ると、それはちょうどサント・ブーヴがその同時代作家にかんする判断を誤ったように、われわれも頻繁に往来している相手の人物について思い違いをし易いことを示そうとする欲望から生まれたものなのであって、そのことに疑いをさし挟むわけにはいかない。〉(p. 26)

果してそうであろうか？ 私にはとてもこんな断言はできない。それにブルーストが批判したサント・ブーヴの方法は、何よりも実生活・日常生活での作者と、作品創造に向かう作者との混同であった。そのことと、単に実生活の次元で他人に対してわれわれが犯す思い違いとは、水準を異にしているのではないであろうか。

私はコルブがここで余りに結論を急ぎすぎたと思う。そして彼がこのように結論を急いだのは、おそらく1971年にプレイヤード版に収められた《サント・ブーヴ反論》と《ジャン・サントゥイユ》の編集方針に、強い疑問を抱いているためであろう。事実、それらの編集はかなり問題を含んでおり、少なくとも《サント・ブーヴ反論》についてはコルブと正反対の見解を示していると言っている。編者の1人ピエール・クララックは書いている。

〈ブルーストの大小説が評論《サント・ブーヴ反論》から生まれたとか、この評論が発展しさえすればこの大小説になるのだとか考えるのは、およそ真実性を欠いている。〉(《サント・ブーヴ反論》p. 827)

〈《失われた時を求めて》は《ジャン・サントゥイユ》から生まれた(決して《サント・ブーヴ反論》からではない!)〉(《ジャン・サントゥイユ》p. 983)

こうしてクララックは、イヴ・サンドルの協力のもとに、小説部分をいっさい省いた《サント・ブーヴ反論》を編んだのであった。コルブはこのプレイヤード版編者の解釈に真向うから異を唱えるべく、いささか性急な結論にはしったように私には思われる。

《サント・ブーヴ反論》の含む問題は複雑であり微妙である。見られる通り、《サント・ブーヴ反論》とは何なのかということにさえ一致した回答があるわけではない。しかしこ

ここにプールの“回心”があり、この時期を境として《失われた時を求めて》の創作へと彼が入りこんでいくことを思えば、この1908-1909年のプールの後は今後もさまざまな形で検討の対象にされることであろう。すでに日本の若い研究者のなかで、この点に鋭い照明をあてる人も現われている。本書は、今後この時期のプールの後について調査する上で不可欠の資料となること確実であるが、コルプの解釈が決して説得的でないことも上に見た通りである。それは彼の切り拓いた実証的探求と推理の有効性をあらためて確認させるとともに、その方法の再検討の時期が来たことを暗示しているように思われる。

(1977年9月15日記)

*Cahiers Marcel Proust 8: Le Carnet de 1908, établi et présenté par Philip Kolb, 1976, Gallimard.*

## Morris Dickstein: *Gates of Eden: American Culture in the 60's*

平野 信行

何事であれ、鮮烈に印象付けられた体験は容易に脳裡を去り難く、ある程度の距離を置いて客観的に眺めるのが困難である場合が多いが、ある時代ないし年代を論じるとき、このことはことに明瞭に看取されるようである。

たとえば、1920年代、1930年代について種々の回想的著作を公にしている Malcolm Cowley や Edmund Wilson の例を考えてみるとよい。彼らの作品が読者を惹き付ける

のは、文筆家としての二人の力量もさることながら、上記二つの年代の体験者として、自らの経験した事柄をできるだけ客観的に叙述しようと試みながらも、時代の子としては、彼らの見聞したことにコミットせざるをえぬ、この相反する二方向の力関係の間に生ずる独特の色合いであると言ってよいであろう。しかし、1970年代も中間点を過ぎ、やがて1980年代を迎えようとする今日から見れば、1920年代も1930年代も遙か過去のことである。それに比較すれば、1960年代は、1920年代に関する F. L. Allen の著書 *Only Yesterday* のタイトルがまさに適切な「つい昨日のこと」である。ここに取り上げた書物は、副題にあるように、その「つい昨日のこと」の1960年代のアメリカ文化を論じた著作であり、疑いなく著者は同年代を身近に体験していることを考えれば、時代へコミットする程度も自ら深くならざるをえないであろうし、平安な10年間であったとは決して言えぬ1960年代からある程度距離を保って、客観的に眺めるのが困難であることは、容易に想像できるところである。著者がどの程度の客観性を持って、また、どこに主観性を置いて叙述しているか、本書でもっとも興味深いのはそこである。1920年代や1930年代とは異なって、1960年代は、評者を含めた読者にとっても「つい昨日のこと」であるから、著者の主観性、客観性云々は、とりもなおさず、読者のそれにひきつけて考えられるからだ。そうした観点から本書を読むと、書名の *Gates of Eden* という言葉が俄に意味を持ってくる。なぜなら、ここには紛れもなく著者の主観が反映しているのだから。

1960年代のアメリカといえば、内憂外患で問題山積の10年間であり、その多くが1970年代の今日まで持ち越されていることは、今更多言を要さないだろうし、そのなかでアメリカ文化も大きく揺れ動いたことは当